会報
第193号
題字出口草露
発行者　〒679-5322佐用郡佐用町上石井685　安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ
会計　〒657-0043神戸市灘区大石東町4-3-1-305　福島妙子
振替　01110-5-6903
印刷所　㈱甲南堂印刷

2015年度神戸短歌祭　(於)県民会館パルテホール

総会・鼎談「阿木津 英氏を囲んで」

兵庫短歌賞　山田　恵子さん
新人賞　山田　麦さん
奨励賞　吉永　明代さん
太田冨美恵さん
山中　洋子さん

熱いおもいをやりとりする各氏

神戸短歌祭は4月29日(祝)午後一時から県民会館パルテホールで開催された。兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞の表彰式と総会の後「短歌にとって『美』とは何か～阿木津英氏を囲んで～」のテーマで鼎談が催された。

総合司会は桂保子氏と種田淑子氏の二人。兵庫短歌賞には「ナビはそれより」の山田恵子氏。新人賞には「ロベルト幻想」の山田麦氏。奨励賞には「刃となりて」の吉永明代氏、「あをく鳴るらむ」の太田冨美恵氏、「ホワイトアウト」の山中洋子氏の三氏が選ばれ、夫々安藤代表より表彰状が授与された。受賞の各氏の喜びの挨拶に続いて選考委員を代表して小谷博泰氏より選考の経過についての報告があった。

受賞式の後、議長に浮田伸子氏を選出し、平成27年度兵庫県歌人クラブの総会が開催された。安藤代表より26年度事業報告。その中で、昨年から始めた歌集の批評会が好評で今後も継続したいと強調された。池本登代子氏による会計決算報告。小畑庸子氏による会計監査報告があり報告は全て承認された。今年度は役員・幹事の改選期にあたり、6名の幹事が退任し6名の新幹事が就任。平成27年度役員として次の各氏が承認され新体制が発足した。

代表（事務局長兼務）　安藤　直彦
副代表　前田　昭子
　　小林　幹也
事務局次長　三津野幸代
会計　福島　妙子
監査　兼貞　靖行
新顧問　小畑　庸子

安藤代表が平成27年度事業計画案を提案。「昨年と同じ事業は内容の一層の充実に力を入れたい。来年歌人クラブは60周年を迎える。記念事業として会報の縮刷版をつくりたいので購入協力を願いたい。又阪神大震災後20年経つので震災体験の作品が散逸してしまわないように歌人クラブで蒐集していきたい。」提案は満場一致で承認された。

阿木津　英さん

休憩の後、小林幹也氏よりパネラーが紹介され、前掲のテーマで鼎談開始。パネリストは阿木津英氏（八雁）江畑實氏（玲瓏）中川昭氏（海市）、司会は安藤直彦氏で2時間半余り白熱した討論がなされた。漠然として難しいと感じた内容がコーディネートされゆく中で分かりやすく焦点化され充実した催しとなった。（詳しい内容は次ページ以下に記載。）前田副代表の閉会の辞により午後4時半に散会。参加者１００名。

（松田辰子）

平成27年1月11日新年会の記

恒例の新年会は短歌祭や歌集批評会の盛況に加え、外部からの高い評価もあって、新年にふさわしく明るい活気ある交流の場となった。中央と地方が融合し共有して歌の世界が広がることを期待する旨の安藤直彦代表の挨拶に続き、昨年各賞受賞の浮田伸子氏、井上美地氏に花束が贈呈された。兼貞靖行幹事司会のもと、全員の自己紹介と活発な意見が交され、中川昭幹事からは60周年にむけての意欲的な言及があり、そのためにも事務局運営にぜひ若い人達の参加をと促された。小林幹也副代表は、理想と現実の矛盾を恐れずチャレンジャー精神を大切にと力強い言葉で締め括られた。歌への信頼と希望を皆で確かめ得た充実した会となった。出席者36名。　（南　輝子）

鼎談「短歌にとって『美』とは何か」
――阿木津 英氏を囲んで
阿木津 英、江畑 實、中川 昭
司会 安藤直彦

短歌にとって「美」とは何か？　短歌をつくる上で、基本的かつ根本的な、この問題をめぐって、「八雁」の阿木津英氏をお招きし、鼎談が行われた。

阿木津氏は、一九七九年に「紫木蓮まで」により第二十二回短歌研究新人賞を受賞して以来、一九八一年には歌集『紫木蓮まで・風舌』によって第七回現代歌人集会賞、一九八四年には歌集『天の鴉片』により第二十八回現代歌人協会賞、及び第二十六回熊日文学賞、二〇〇三年に『巌のちから』で第三十九回短歌研究賞と輝かしい受賞歴を誇る一方、歌壇きっての論客としてフェミニズムの問題に関心を払い、女歌のあり方をめぐってさまざまな論考を重ねてこられた方でもある。その成果は『折口信夫の女歌論』（二〇〇一年）や『二十世紀短歌と女の歌』（二〇一一年）といった著書にもあらわれている。

鼎談には「玲瓏」の江畑實氏、「海市」の中川昭氏、司会として兵庫県歌人クラブ代表・安藤直彦氏が加わった。

まず阿木津氏が「美」を感じさせる短歌として採り上げたのは、玉城徹『枇杷の花』の次の短歌である。

・起きいでて椅子にゐるとき大いなる寂寥一つ来たりけるかも

・おとがいの膝につかむとする媼道にし行くを春の日照らす

阿木津氏によれば、御自身と玉城徹の関係は、いわゆる世間でいうところの「影響下」にいたのではなく、玉城から恩恵を被ったのは確かであるにしても、自分は自分であるとした上で、玉城のこの「おとがいの」の歌は、老醜を美とした短歌であると紹介された。

一方、「起きいでて」の短歌は、一見内容らしい内容がなく、空疎に見える歌である。しかしそれでいながら、深い余韻を残し、豊かさと気高さを感じさせる。

阿木津氏によると、短歌とは本来このようにあるべきもので、かつて斎藤茂吉が歌の内容よりも調べを重視していたように、石田比呂志もまた短歌はお話になってはいけない、コント的な歌は二流であるとくりかえし語っていたという。

つまり、短歌では「事」ではなく、「物」を詠むべきなのだということで、そしてこの玉城徹の短歌にそくして言えば「寂寥」こそが、詠まれた「物」だということであった。

このような阿木津氏の発言に対して、江畑氏から、確かにこの「起きいでて」の短歌では「寂寥」は重要な言葉である。それから自分としては

明石短歌会

明石公園内会議室
毎月第一・三木曜日

連絡先　田岡弘子
〒673-0845　明石市太寺四ノ一ノ三〇
☎(〇七八)九一二-一二六七三

尼崎歌人クラブ

会長　中野昭子
副会長　兎田孝子

事務局（連絡先）
〒661-0014　尼崎市上ノ島町二-二-十一
佐々木春美
☎(〇六)六四二六-〇一一八

「ゑちうど」の会

代表　上田一成
☆個々の言葉を大切にする場

石田　勝啓　　内海サチ子
小谷智聰子　　寺田　紘子
志田　　栄　　菅野　仁孜
塚本　誠子　　時里　直子
松田津也子　　三木とし子
栗田　明代　　山田　　文
山之内順子　　上根美也子

〒671-1211　姫路市勝原区熊見296－9
上田方　TEL･FAX(079)236-6806

芦屋水甕短歌会

歌会（PM1:30～4:00）
第2土曜日（芦屋市民会館）
第4金曜日（谷崎潤一郎記念館）

・連絡先 〒659-0026 芦屋市西蔵町6-22
☎(0797)31-7220
藤井幸子方
・事務局 〒659-0012 芦屋市朝日ヶ丘町16-34
☎(0797)31-5573
石井佳子方
近くの方の御参加歓迎します

淡路歌人クラブ

顧問　浜田悦子
荒来務
代表・事務局長　清水昭男
副代表　谷池さな
島田英樹
会計　前田陽子

〒656-0651　南あわじ市伊加利1062
TEL･FAX(0799)39-0835
清水昭男

奥播磨短歌会

代表　西川洋子

〒679－1203
多可郡多可町加美区多田435
☎(0795)35－0489

左から、江畑氏、阿木津氏、中川氏

「～けるかも」という収め方も重要だと思うが、果たして今日、この「～けるかも」を現代歌人が用いることができるかどうか。こういう言葉が使えたのは玉城の時代までではないか？　用いたとしても現代では、わざと古典風を擬したような、パロディのような形になってしまい、本来の意味では、つまり玉城が用いた形では使えなくなってしまっているのではないか。その点、現在はよい短歌を詠みにくい時代になってしまっているのではないか、という発言があった。

さらに江畑氏は、「事」ではなく「物」を詠むべきという趣旨は分からぬこともないが、それだと奥村晃作の提唱するいわゆる「ただごと歌」と同じだと捉えられてしまう危険性はないか、「ただごと歌」との違いをここで明確にされておいた方がいいのではないか、と阿木津氏に問いかけられた。

そこで阿木津氏は「ただごと歌」は内容がないのではなくて、無意味なことを詠んでいるのである。つまり無意味という内容がある。無意味と無内容は違うのだと答えられた。

一方、中川氏も短歌に内容を詰め込み過ぎてはいけないという考えに同意を示し、その理由として、内容が鑑賞者や批評家の先入観を誘発してしまう危険性があるため、とした。こういう中川氏の考えの背景には、短歌は、一度頭を真っ白にしてから鑑賞すべきという考えがあるのであろう。

また中川氏は、釈迢空が短歌で「事」を詠むことを志しながらも、ついに短歌で「事」を詠むことを断念し、短歌は叙事詩になれず、宿命的に抒情詩であるという認識の上で短歌を詠み続けていたことを紹介し、さらに自分が「美」を感じる短歌として、釈迢空『海やまのあひだ』の次の短歌を挙げられた。

・葛の花　踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

中川氏によると、この歌の眼目は、三句目末尾の「。」、つまり句点であり、ここでいったんは短歌が句切れる。釈迢空はこのように句読点を短歌のなかに含む試みを積極的に行った歌人であるが、それは迢空の息遣いである。だから鑑賞する場合も、その息遣いに従う形で、この短歌ならば、三句目末尾の句点から、しばらく間をおいてから「この山道を…」と続くように読まなくてはならない。つまり大切な点は、三句目で一度切れているということである。切れているのだから上句と下句はいわゆる因果関係で結び

薫　風

発行人　平井　恭治
入会金・添削料　不要
月刊　会費月　1,200円
旧号　一　部　500円

発行所は神戸市。
創立後半世紀が過ぎました。
歌はこころ。自然を愛し、
人を愛する仲間たちの集まりです。

発行所
〒651－0077 神戸市中央区日暮通4丁目1－7
(サニーコート日暮202号)
薫　風　社
TEL・FAX (078)221-0023
振替　01160-2-6567 薫風社

編集部　長谷川　正
神戸支社　長岡治子　播磨支社　西山寿美栄
宝塚支部　新家絹子　丹波支部　上本このえ
尼崎支部　濱恵美子　三田支部　雑賀実枝子

花鏡短歌会
石橋妙子
〒658-0072　神戸市東灘区岡本2-10-3
TEL (078)441-3740
FAX (078)441-3744
－運営委員－
安藤成子　池本登代子　金田康子　黒部道子　坪田萬貴子　長岡一美　中川裕子　藤本匡代　増井定子　松田博子　水田三和子　三木雅子　三津野幸代　吉矢清子

小野短歌会
松尾　鹿次
代　表　藤原三代子
副代表　阿尾日出子
会　計　藤井　久子
事務局
〒675－1371　小野市黒川町五七三
松尾鹿次
☎(〇七九四)六二－二八四六

香寺短歌会
代表　岩田百合子
会計　井奥　弥生
連絡先　姫路市香寺町香呂438
生田　よしえ
☎(079)232-4003

海市短歌会
編集発行人　中川　昭
発行所
〒650－0027
神戸市中央区中町通三－一－十五
神戸コーポラス七〇一
☎(〇七八)三七一－〇二三九
神戸支部
〒653－0813
神戸市長田区宮川町
四－八－一－三一三
明石多美子　方

つくものではない。ところがこれをかつて御歌所の武島羽衣は「心なく山道ゆきし人あらむふみしだかれぬ白き葛花」と添削してしまった。釈迢空が不満であったのは当然である。これだと因果律の短歌になってしまって少しも面白くないと述べられた。

それを受けて阿木津氏も、釈迢空の一字アキや、句読点を短歌に入れる試みは、既存の短歌の形式を変えたい、新しい形式をつくりたいという思いからなされたものであると述べられた。

さらに阿木津氏は続けて、句切れは短歌にとって重要なものであり、歌人はこれをもっと大切にしてしかるべきものであるにもかかわらず、それに反して、現代の歌人たちのなかにはこの句切れに余りに無頓着な人が多いのではないか、と現代の歌壇風潮に懸念を示された。

それにしても、短歌で「事」を詠むことは果たして、本当に無理なのだろうか。短歌は「事」を詠むことに適さない詩形なのか。たとえば塚本邦雄は敢えて「事」を詠んで、つまり短歌の世界に物語性を導入することによって新しい境地を確立した歌人ではなかったか？

司会者安藤氏のこのような問いかけに対し、阿木津氏は、もちろんそれもあろうがそれ以上に、句切れを意識して短歌をつくるという伝統を、語割れ句跨りの手法によって打ち壊し、そこに美学を求めたのが塚本邦雄ではなかったかという見解を示した。

左・司会の安藤氏、右・討論者紹介の小林氏

つまり本来切れるべきところで切れず、切れそうにないところで切って読ませるという手法によって、塚本邦雄は独自の美学を打ち立てたということができる。

しかし『感幻樂』までの初期六歌集の説明としてはそれでよいとしても、『魔王』以降の終末六歌集についてはどうか、という疑問が江畑氏から発せられた。

たとえば次のような短歌が塚本邦雄の終末六歌集にあたる『詩魂玲瓏』に見られる。

・日本危ふし危ふかりけり
怪しさの限りは「おほきみの邊にこそ死なめ」

かつての初期六歌集までの塚本邦雄ならば、どんなに語割れ句跨りがあって、途中でぎくしゃくしたリズムをかもし出していても、全体はぴしっと三十一音でそろえられていたにもかかわらず、ここではそれが字余りとしてあらわれている。まるで今まで言いにくかったことを早口でぱっとまくしたてているかのようである。この塚本邦雄の終末六歌集の問題をどのように捉えるかが、今後の歌壇の一大問題ではないか、と江畑氏は結ばれた。

釈迢空と塚本邦雄。この一見、正反対のように見える二

コスモス藍の会

小野はつね　小野　幸恵　久保　崇子
久米川孝子　黒田　富栄　菅原　艶子
田中　恭子　林野千代美　福井　弘子
本位田米美　水野　美子　三宅　幸子
山本　元子　弓岡あき子

〒671—0121　高砂市北浜町牛谷三八八
久米川　孝子

コスモス
加西勉強会

連絡先
〒675-2365　加西市畑町577
藤岡　成子
☎(0790)42-0415

佐用短歌連盟

会長　安藤直彦

グループ代表
船引貴明
尾上節子
新家イサ子
菅原艶子
吉田照子

［連絡先］　0790(84)0150　新家 イサ子

コスモス　葛の花

会場　多可町八千代区
八千代プラザ
第二水曜日　午後１時

代表
〒677-0121　多可郡多可町八千代区
花の宮1171
岸本　しげ子
☎(0795)37-0680

創刊　宮　柊二
コ　ス　モ　ス

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭1-2-17

姫路支部

支部代表　飯田　進
運営委員　尾上田鶴子　浜崎　泰子
矢内　温代　三宅　幸子
連絡先　〒671－2233　姫路市太市中678
飯田　進　☎(079)269-0513

流派を超えた短歌交流誌
楠田　立身　編集
象
(SHO)

入会歓迎
〒670-0843
姫路市城東町清水13-7-404
楠田方　☎(079)285-1695
短歌ぐるうぷ象の会

人にも、中川氏によると共通点が見られるという。それは敗戦から来るアメリカ嫌悪の念だという。塚本のそれは有名だが、釈迢空にも『倭をぐな』に次の歌が見られる。

・耶蘇誕生会の宵に　こぞり来る魔の声。少くも猫はわが腓吸ふ

中川氏によれば、この短歌には、敗戦後日本に入ってきたアメリカ兵に対する迢空のくやしさ、何とかして馬鹿にしてやりたいという思いがあらわれているという。

最後に、鼎談者それぞれが「美」について詠んだ自作が披露、解説された。

釈迢空、塚本邦雄の戦後意識に注目した中川氏は、やはり御自身にとっての戦後を詠み込んだ次の短歌。

・ながき落日の砂丘を登りつめてゐる一人の戦後の嬬に逢ふため

『九夏』に収められた短歌である。

一方、鼎談のなかで塚本邦雄の語割れ句跨りに関する発言が目立った江畑氏は、やはり御自身の、語割れ句跨りを用いた次の短歌。

・オルゴール総身の針ゆるやかにめぐるこの音楽のはらわた

『檸檬列島』に収められた短歌であり、第四句、第五句が語割れ句跨りになっている。

阿木津氏は、最新歌集『黄鳥』から次の短歌。

・風なかに捩る樹幹のごとくにもトルソーひとつわが立つ前に

二〇〇九年に、静岡県立美術館でロダンのトルソーを見た衝撃からできた一首だという。ロダンは初め、このトルソーを手も足もある彫像としてつくっておいて、その後切断してしまったらしい。

美への探求のために一度つくった彫像の手足を切断してしまったロダン。それに共鳴する阿木津氏。そこには芸術に奉仕する者としての厳しさがあらわれていよう。今回の鼎談では阿木津氏の短歌にかける思い、その厳しさが発言の随所に垣間見られ、聴衆にとっては刺激的だったのではなかろうか。そのときおり放たれる辛口コメントが、あるいは自分に向けられたものではないか、と感じたのは私ばかりではあるまい。身の引き締まるような瞬間が何度かあった。しかし阿木津氏は他人に厳しいが、何より御自分に厳しい人である。そのことが伝わってくる鼎談であった。

また保田與重郎がどうにも好きになれないという発言も印象に残るものであった。阿木津氏は、学生のころから御自身の研究のために必要上どうしても保田與重郎を読まなくてはならなかったが、読めば読むほど不愉快になったという。それは釈迢空がぎりぎりのところで堪えていたことを保田與重郎がやすやすと乗り越えてしまっているように感じたからだという。

そういう阿木津氏もまた、おそらくは何かをぎりぎりのところで堪えてきた人なのであろう。そうでなければ、このような発言に到るはずがない。堪えてきた者だけが持てる自負を感じさせた。

また、伝統美は犠牲を払って身につけるものという趣旨の発言もあったが、これも同様であろう。やすやすと伝統を継承するなどという者を阿木津氏は決して許せないのである。それはもちろん、阿木津氏自身が多くの犠牲を払って伝統美に到ったという自負があるからであろう。それが伝わってくる鼎談であった。

今回の鼎談では、鼎談者の応援に駆け付けた「八雁」の島田幸典氏、「玲瓏」の林和清氏、尾崎まゆみ氏の会場からの発言もあり、鼎談そのものに花を添える形となった。

（文責：小林幹也）

白珠

入社費　五〇〇円
社費（六カ月）　六、〇〇〇円
旧号見本　切手　四〇〇円

兵庫県内支社
神戸白珠の会
宝塚白珠の会
加東支社

〒562－0001　箕面市箕面三－五－八
白珠社
代表　安田　純生

高嶺

昭和２年　早川　幾忠　創刊
昭和21年　二宮　冬鳥　継承
平成８年　井上　生二　継承
平成25年　江島彦四郎　編集
・支部長・運営委員　野瀬　昭二
・在県同人
石橋　光子　井口　通子　大塚　照美
坂田嬉和子　正法地清美　松田　郁子
松田　芳子　福井テル子
△事務局　伊藤　敦子
〒673-0011　明石市西明石町4－7－21
☎(078)927-4439

但丹歌人（隔月刊）

発行　但丹歌人会
代表　斉藤　好正
編集発行人　中島眞喜子
〒669－5229　朝来市和田山町宮438
☎(079)672-2334
運営委員　足立美津子　井上　澄子　尾形　貢
衣川由弥子　高橋　博子　中島眞喜子
平野　君枝

新月

編集発行人　筒井　早苗
発行所　奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西二－六－三〇
☎(〇七四五)七五－六七〇〇
芦屋支部
西村　郁
☎(〇七八)七三三－八五六九
西宮支部
市川美恵
☎(〇七九八)五三－〇四五六

丹生 TANZYO

主張　生活写実を主体として真剣に作歌力を深めようとする集り
創刊　昭和二十一年
代表　兼貞　靖行
〒673－0424　三木市自由が丘本町2－232
☎(0794)83-0803
編集同人　井口通子・林　茂代・藤井貞子・前中　仁・兼貞靖行・上倉佐田子・山中洋子・山本樹一・土居きよ
事務局連絡先　〒673-0533三木市緑ヶ丘町東2-11-5　山中洋子方
☎(0794)84-0296
振替口座　00950－9－195197

千鳥短歌会

山桜や紅葉に染まる山々。波荒く、また凪ぎる瀬戸の海。渡る千鳥。
取り巻くすべてが歌心を誘う恵まれた環境にある短歌会です。月一回、第一土曜の午後行われる例会は活気に満ち、和気あいあいの楽しい雰囲気です。

代表　平　啓子
〒656－0426　南あわじ市榎列大榎列七四三
☎(〇七九九)四二－二〇六二

2014年度 兵庫短歌賞

山田恵子（塔）

1955年生まれ、南あわじ市在住
「心の花」「眩」を経て「塔短歌会」
2008年、神戸新聞文芸短歌の部、年間最優秀賞を美咲ハルの名で受賞

ナビはそれより

・君の歌集を魔法の杖に島を出る陸の港にバスを待つ朝
・山なみに沿いて流れる小夜曲はあの日の調べ耳に点れる
・匿名の誰かになりたい街に来て私の名前を呼ぶひとを待つ
・首都高の上昇気流に乗りながら寂しがってる掌がある
・友人でいれば親しきふたりなり神田古書街左手に見て
・隙間なく電飾付けし街路樹の枝の傾ぎよ恋持て余す
・恋情は止められないから止めろとは言えないなどと狡い　男は
・弱音吐く背中見せつつ気ままなる独りの日常聞かせくれたり
・ぐずぐずと想い放せずいる吾に止（とど）めの言葉の追いかけて来る
・風に倒れ雨に起き上がろうとするコスモス一叢わが視野にあり
・選ばれたひとは怖れずゆったりと構えればいい嵐は過ぎる
・守るべきひとを抱きて眠る君浮かべて夜の河を渡りぬ
・責めるしか想いの嵩は伝わらぬセーターに爪立てる猫のように
・返信は熟慮の上に届きたり余白に迷路の出口を探す
・思い切ろうとして「すき」の溢れれば信号待ちのブレーキ緩む
・いつまでも胸に逆波立たせいる逃げ損ないの言霊眠れ
・丁寧に灰汁を掬えば見えてくるスープの底に踊る人参
・穏やかに君を語れる日も来るか日向にしんと夢死なしめて
・吾の心の行き着く場所を尋ねしにナビはそれより口を利かない
・もう過去にしてしまいましたか桜葉の紅は散らずに揺れているのに

2014年度 新人賞

山田麦

生年　秘密
在住地　加古川
短歌歴　10年ほど
受賞歴　神戸新聞文芸短歌年間賞など
結社　もと「眩」所属

ロベルト幻想

・わたくしのうなじをつたいおちてゆく雨粒ひとつ蛇になる、ほら
・ロベルトと名付けた蛇が垂れさがる窓辺を濡らすにびいろの雨
・右腕に絡まる蛇の心地よさ　冷たくもなく優しくもない
・攻撃と逃避を軸にしてまわる蛇のかなしみ　きみに似ている
・水滴の淵を残して透きとおるくもりガラスの濁り　何処へ
・男から蛇が一本抜けて行く　もう愛すると決めた瞬間
・性愛に正しい形が無いように解けぬ蛇はこの世にいない
・不確かなものをとらえて蛇行する視線の根元に眼球のあり
・手も足も千切って捨てて伸びていく鱗の生えたものの光沢
・うちももに鱗を隠し眠る夜のただひとすじの君の感触
・なにが夢なにが幻なにもかもどうでもいいわ　おいで混沌（ロベルト）
・寄り添えば背骨の窪みに合っている洞窟みたい　きみもわたしも
・ほんとうのことのつながる街路地に今夜だれにも許されず立つ
・映写機が幻想映す日曜日　素足で踏んだ蛇の感触
・羽根を持つことの薄さに憧れて蝶を二つに裂けないでいる
・ひとすじの蛇を飲み込むようなもの　愛せないなら滅びよ、世界
・「天国の外に生まれたぼくたちは生き抜くための羽根を持たない」
・雨の日に閉ざされているふたりなら世界がどこにあったっていい
・消えてゆくいのちのひくい扇動をみちびくような蛇の去り際
・哀しみもやがて静まりこの空にあらゆる色から消え残る青

2014年度 奨励賞

吉永明代（水甕）

1965年生まれ、姫路市在住
短歌歴3年、「水甕」所属
趣味（ベリーダンス・クラシックライブ）

刃となりて

・バイバイを覚えしばかりを連れたりき青葉の楓風にそよぐ日
・硝子瓶の水面に泡をあまた浮かせ雪柳確と呼吸している
・オフイス街に吸わるる蟻の行列に這入れぬ蟻は触角持たず
・バラは散り棘伸びゆけり非社会人お前に四度めの夏が巡り来
・パソコンの青き炎に照射され闇に漂うクラゲのこころ
・水鏡に己を映す半夏生　白になれない緑の葉先
・傷ついた翼にて飛ぶ術知らず平成生まれのか細き戦士
・かつて意欲を結びしままの形にて吊るされておりブルーのネクタイ
・虫を追うかの愛くるしかりし眼が刃となりて我を貫く
・地にしかと足をつけいるや二十八センチ皮靴時かけ磨く
・冷房の風に揺れいる萩の花の夢むは空へ舞い立つ白蝶

・想い溢るるとき散りぬべし百日紅
・心を言葉となさむ術なく
・寒駅の暗闇に消えゆきし背は振り向いたかも知れない気配
・トラックに積まれてゆきし透明の袋の中は黄金の公孫樹葉
・深夜より初冬の雨は強まりぬ灰色仔猫の鳴き声消して
・庭先より星が綺麗と我を呼ぶ帰省せる子は鞄を置きて
・手の中のセミを見せきし日のように肉刺のてのひら我へ開きぬ
・青白き頬浅黒く逞しくなりてしまいぬ男一匹
・かの日子に教えたように手に掬い犬に教うる　これが雪だよ
・まだ青き金柑の実は冬の日に膨らみはじむみどり葉のなか

2014年度 奨励賞

太田冨美惠（心の花）

1939年生まれ、朝来市和田山町在住
1982年「形成」入会
1993年「眩」入会
歌集『冬の天秤』

あをく鳴るらむ

・誇りかに欅立ちをり被きたる雪に如月の蒼を映して
・朝かげのにほへる空のただなかにますぐなる枝の重なりて美し
・葉のかげに雛育ちたらむ鳥の巣が裸木にまるく雪を被る
・鳥になり空のあを映ゆ雪の上に小さき足形のこしゆきたし
・雪原に月の砂子の降りくれば足がたの影あをく鳴るらむ
・雪やみてしづもり深き原に立ち欅の幹は蒼く冷えゆく
・雨のしづくにいまだ濡れぬる白き月、冷えしるく立つ枝の秀にあり
・渓ふかく霧が霧よぶ朝まだき空の高みを鳥の声過ぐ
・古木なる欅の幹の堅く冷え蒼き霊気をまとひて立ちぬ
・墓石の陰に小さくある石に祖母は膝折り水そそぎぬし
・誰の墓と尋ぬる吾を引き寄せて黙せるままに石見つめぬき
・問ふてはならぬを問ひたる幼子はその後を石に触れずきたりぬ
・わらべ唄うたふ祖母なりかはたれにたれに聞かすやきれぎれの節
・うすずみの橋をつなげて尋めゆきし人と会へしや西はゆふやけ
・祖母とほくゆきて寄辺のなき石よ雨ふれば苔の花に埋もれむ
・明かすなき傷み抱きて逝きし祖母いまはに小さき石おもひしや
・悲しみが緒を引き澱となれる石つつみて雪ふれ　春告ぐる雪
・まだかたきつぼみにはつか彩萌す山茱萸の枝にひかり降る音
・天窓ゆひかり射しくる卓に置く雨のしめりののこる山茱萸
・天上に花の宴のひらかれて陽の照りながら雪の舞ひくる

2014年度 奨励賞

山中洋子（丹生）

1945年生まれ、三木市在住
2000年、田中義昭主宰「丹生」入会
「丹生」編集委員・事務局

ホワイトアウト

・本当はさうではないと言へぬまま文学少女と言はれし昔
・図書館の窓辺に読みし旅の本二人の男の便りに出合ひぬ
・スマホなき五十年前雑誌にはお便りコーナー駅に伝言板
・「槍・穂高散歩して来ました」の一言に夢見る乙女の一筆啓上
・悪筆は親ゆづりですと然りげ無く書きてよこせし男の一通
・行間の一行読まむ君の文思ひ書かれず書類のごとし
・新幹線に募る思ひよ待つ人のあれば降り立つ新大阪駅
・0系の新幹線のありてこそ許されぬまま旅立ちにけれ
・吾が友と「関西弁てやあね」など言ひたる学生時代杳けし
・おとなしき吾でありしがただ一度追ひかけ来しは君のみの街
・ただ君と共に居らばやこはきこと何もなきとぞ思ひてゐたる
・人はいつ永訣の日をば知るならむ余命は知らず若き永き日
・言はぬ事が物を言ひたる食卓の箸使ひつつ夫の沈黙
・歌ひねる暇あるなら掃除機でもかけたらどうと夫に言はれぬ
・もう何も言はることなき日にちは月を仰ぎし昔に戻る
・知盛のやうにはゆかず見るべきも未だ見ずして逝きにけるかも
・目印の無き角いくつ曲りしやもうあなたには会ひにゆけない
・後の月の思ひもかけぬ明るさに君の還れぬこの世と思ふ
・未亡人五人と男性一人にてカレーハウスにつどふ昼食
・思ひ出は限りなしとも何ひとつ無きとも思ふホワイトアウト

受贈歌誌・会報等

印南野文庫・海市・薫風・幻桃・コスモス姫路・白珠・象・丹生・但丹歌人・茅花・津布良・鳶が城便り・とべら・鳥・白圭・花鏡・飛聲・ひめぢ水甕・文学圏・夢・林間・六甲・尼崎歌人クラブ会報・大分県歌人クラブ会報・京都歌人協会会報・熊本県歌人協会会報・短歌堺会報・短歌総合新聞『梧葉』・長野県歌人連盟会報・新潟歌人クラブ会報・西宮歌人協会会報・大和歌人・日本歌人クラブ「風」・和歌山歌人クラブ会報・大阪歌人クラブ会報

平成26年度「兵庫短歌賞」選考経過
厳しく表現と闘え

中川　昭

平成二十六年度「兵庫短歌賞」選考委員会は三月二十九日、神戸市勤労会館で安藤直彦・尾崎まゆみ・小谷博泰・小林幹也・田岡弘子・中川昭各氏の出席のもとに開かれた。選考は昨年同様、委員が一位に推す作品に10点、以下十位に1点を加点する方法をとり、高点順から第一次審議となった（別表参照）。

総合得点40点で「兵庫短歌賞」に決まった「ナビはそれより」（塔・山田恵子）は委員三名の一位推薦が大きく評価され、42点の「あをく鳴るらむ」（心の花・太田冨美恵）はその差によって「奨励賞」となったが、内容・力量ともに「ナビはそれより」に雁行し、熱論激しく時間を費やした。

「新人賞」に決着した「ロベルト幻想」（無所属・山田麦）は42点の高点を得たものの、一位に推す委員が一人もいなかったところにこの作品の根底に潜む問題があった。即ち虚構が勝った作為性である。しかし用意周到な表現手法の巧みさは委員一同の瞠目を集めるところではあった。

「奨励賞」は今年三名。先記太田氏のほか「刃となりて」（水甕・吉永明代）、「ホワイトアウト」（丹生・山中洋子）の二作が選ばれた。総合得点26点の「淡き日のいろ」（花鏡・福山裕恵）、25点の「みんな生き物」（心の花・武富純一）は、いずれも一位推薦の委員がなく、23点の山中氏の受賞となった。一次審査においても山中作品の評価は高く、二次審査において、その豊かなストーリー性、愛する者を失った悲しみの抒情性が更に高く評価される結果となった。

ほかに注目される作品として「里神楽」（象・伊藤絹子）、「ハモニカの音色」（無所属・遠藤瑛子）、「終活のすすめ」（短歌人・高井忠明）などがあげられる。

今回はおおむね選考委員の厳しい批評眼に重きをおき、結果として一位推薦全てが得点と相俟って受賞した（新人賞を除く）。実作者もまた厳しく表現を問う姿勢を見せてほしいと願い、次回に期待する。

2014年度兵庫短歌賞等点数表
（評価順位を点数に換算）

作品名＼選者名	安藤	尾崎	小畑	小谷	小林	田岡	中川	合計
刃となりて		6	9		8	10		33
ホワイトアウト	2	10				5	6	23
みんな生き物	6	8				7	4	25
終活のすすめ		4		3			7	14
里神楽				9	9	1		19
あをく鳴るらむ	10		8		10	9	5	42
ハモニカの音色	3	7	4	2		4		20
ナビはそれより	9		10	10	1		10	40
ロベルト幻想	7	5	7	7	7		9	42
淡き日のいろ	1			6	3	8	8	26

応募者多数(37名)のため上位10番まで記載

選考委員
安藤直彦・尾崎まゆみ・小畑庸子・小谷博泰
小林幹也・田岡弘子・中川　昭
事務担当
桂　保子・矢内温代・吉野節子

兵庫短歌賞全応募者（到着順・敬称略）
（公募の部・ノミネートの部）

嶋澤　隆、長谷川喜世子、池本俊六、鈴木紀子、石飛俊郎、図子利明、棘木正一、内藤みさを、山田恵子、岡本絹江、塩見俊郎、臼井てる子、山田　麦、大木津多代、奥田光子、岸本万由美、福山裕恵、玉川裕子、植木　操、西村節子、老月良一、桂日呂志、來田康男、吉永明代、山中洋子、武富純一、髙井忠明、伊藤絹子、菅原艶子、矢野義信、小林まや、太田冨美恵、河合弘美、上月しげ子、遠藤瑛子、安藤三從、松田辰子　(37名)

今号に掲載できなかった平成二十六年度兵庫短歌賞応募作品は次号にてその作品抄、選評を掲載の予定です。ご期待ください。

2014年度 第三回幹事会報告

3月28日（土）、神戸市勤労会館にて開催。出席幹事28名。委任状24名。髙井忠明氏の司会のもと、安藤代表の挨拶に続き、議長に松尾鹿次氏を選出。

◇2014年度事業報告
（主なもの）
①「兵庫短歌賞」（兵庫短歌賞2名、新人賞1名、奨励賞1名）授与。
②神戸短歌祭　催し「歌合せ」、判者　大辻隆弘氏、司会　尾崎まゆみ氏
③歌集批評会　第2回（6月）第3回（9月）第4回（2月）
④会報の紙面の充実を図る。（全16頁に年刊歌集、兵庫短歌賞応募作品評）。
⑤池本登代子氏会計報告。
⑥小畑庸子氏会計監査報告。

〈退任幹事〉落合けい子、落合民子、小畑庸子、兼貞靖行、西海隆子、吉岡生夫

〈新任幹事〉廣庭由利子、藤本則子、福島妙子、本田勝彦、南　輝子、島田英樹
※安藤代表が再任。新役員は代表に一任。

◇2015年度事業計画
（主なもの）
①兵庫賞表彰式4月29日総会席上提案　小畑庸子氏顧問に。
②兵庫県歌人クラブ主催の歌集批評会、勉強会。（6月・9月・2月）
③11月14日（土）ふれあいの祭典兵庫短歌祭姫路キャスパーホールにて。催し「結社対抗歌合せ」判者　島田幸典氏。
◇特別提案　来年兵庫県歌人クラブ創立60周年。記念事業として「会報」の縮刷版を発行したい。昭和62年5月（過去30年分・年4回4ページ）に第107号まで発行されている。第108号から196号までが対象。500部刊行の予定。縮刷版購入の協力を。
◇阪神淡路大震災の当時の歌が散逸しないよう歌人クラブで蒐集しておく予定。協力を。

平成二十六年度

兵庫のうた　秀歌抄　『年刊歌集』第54集より

はじめに

安藤　直彦

とかく埋もれがちになる短歌作品、良いものを良いとして、多くが共有し顕彰し、創造意欲を高めたいという願いから、昨年より当会報に特集を組む企画を持ちました。お陰様で、その選歌、選評も多くのご理解、ご協力を得て好評をいただいております。「よき歌は生を強むる」と言います。詠むもの、読むものにとって、この会報がよき研鑽交流の場でもありますよう祈ります。

兵庫短歌賞選者が選んだ「わが注目した歌一首」（あいうえお順）

安藤　直彦選

「そこまで」と書き置きをして出てきたりかなしいときは空がきれいだ　楠田智佐美

文語律、口語律の上下句がよく呼応し、平明な中に深さと広がりの生まれる妙。

尾崎　まゆみ選

蒼き灯にさくらとともに照らされてこの鋪道に重量を溶く　藤井　幸子

夜の桜の妖しさとともに照らされて影は重なり溶けあうような感じ、何よりも「重量を溶く」にひかれる。

小畑　庸子選

その小きなづなにいかなる地図のある蝶ひらひらと舞ふ昼下り　益永　典子

蝶で「ひらひら」のオノマトペはつき過ぎと思うが上句の発想のよさがそれを超えた「いかなる」の疑問に「ある」と連体形を置いて成功した。

小谷　博泰選

満月がまっすぐ道を照らしだす地球にひとつ還ってゆく家　岩尾　淳子

素材の取り合わせによりシュールな雰囲気を感じ、印象が鮮明である。

小林　幹也選

イチョウの葉一枚我と入りゆく定員二名の回転ドアに　吉永　明代

ふとまよい込んだ公孫樹の葉を、恋人かのように詠んだところが巧みである。

田岡　弘子選

「そこまで」と書き置きをして出てきたりかなしいときは空がきれいだ　楠田智佐美

四句に対する五句の逆接的な表白が効いておりその心情が切にひびく一首。

中川　昭選

我が心に貼りつくがごとく夜の蛾がガラスの上に動かざるなり　樫本　雅子

夜の蛾は心の喩。透明なガラスに映されたおぞましさが哀しい。

正述心緒―それに近しい歌―

野瀬　昭二

ゆくりなく出会ひたる余花再びを賜へるいのち慎しみ仰ぐ　石橋　妙子

サプリメントのみで二旬を生きたりき排水管のごとかりし腸　楠田　立身

一人減り二人減りして減ることに慣れて生きおり季節の狭間に　土居　正

わが意志を離れしもののいきなりを術後三日を茎立つ魔羅は　安藤　直彦

体弱きわれを日毎に摩擦して鍛えてくれしはこの叔母ならず　井上　美地

長き世を咲き継ぎ来しがいにしえもさほど変らぬさくらならずや　上田　一成

庭木々のもみぢあかりも終はりたり歳晩の雨音もなく降る　浮田　伸子

一羽光りやがていづれも光りつつ鳥渡るなり　海のはたてへ　小畑　庸子

花満たす小さき箱に寝かされて友はまこと死者となりたり　黒崎由起子

抱き締めて遣りたい程のあどけなさ歌褒められて見する羞ひ　松尾　鹿次

手が混むと歌は巧緻になり、明・隠の喩を活用し大方の瞠目を集め、いい歌を看過する。ここでいう、いい歌とは、心の直叙、すなわち正述心緒歌の謂である。長い年月、華麗な作風と理念に追随、感化を得、いま尚、敬する先賢からの十首に言触れてみたい。

◎石橋さん―余花は安易な外象ではなく、こころへの収斂を正述する。◎楠田さん―生き得た二旬にいまがあり、腸は事物ではなく自身の正述である。◎土居さん―季節の狭間は正にいのちの狭間である。◎安藤さん―意志から離れていたモノが再び呼応する。本人のみが知り得る正述である。◎井上さん―この叔母ならずにこもる反語の奥処。◎上田さん―咲くいのち、散るいのちへの正述心緒。◎浮田さん―歳晩に沁み降る音なき雨。◎小畑さん―無から有へのひかり、海のはたては心緒の直叙。◎黒崎さん―小さき箱に寝かされた相を死者と正述する。◎松尾さん―抱き締めてやりたいの正述は作者の羞恥でもあろう。多くのいい歌を割愛したが、諒とされたい。

わがよしとする歌十首

足立　勝歳

ゆくりなく出会ひたる余花再びを賜へるいのち慎しみ仰ぐ　石橋　妙子
膏肓に入りたるいたつき逃れきて歩むあしたの空の藍青　楠田　立身
一人減り二人減りして減ることに慣れて生きおり季節の狭間に　土居　正
玄関の隅にひらたき女靴置かれてひとつ　喪の星明かり　安藤　直彦
水面は穏やかなれど底ひなる流れは疾し瀬戸のうち海　小畑　庸子
わがこころ打ちてやまざるふるさとの海鳴り恋し暗きうみなり　澤田　尚夫
をりたたむ渦のまなかへのまれゆく飛沫も射干のはなのごと散る　中川　昭
忘れられしテレホンカードの存在と思ふ雪降る夜のわたくし　藤岡　成子
街なかの生田の森のせせらぎに幽かに灯し蛍ながるる　船橋　貞子
肩の力を抜いて生きよと風の言ふ生きてみようかすすきのやうに　牧野　秀子

人はなぜ歌を詠むのであろうか。私の場合、生きるためである。生きるために詠まずにいられないのである。詠むテーマは喜怒であり、哀楽である。もしくは自然への畏敬の念であり、感動である。

石橋、楠田、土居、安藤氏の歌は歌とは何かということを教示してくれている。人は生まれながらにして四苦を抱えている。時の移ろいのなか体験する、その一つ一つが貴重である。その瞬間を切り取っていく歌に心に沁み入ってくるものがある。楠田氏の「空の藍青」から強い意志を感じる。小畑、澤田、中川氏の海の歌。それぞれの海の叙述は厳しい。歌から作者の厳烈に生きる姿勢が伝わってくる。藤岡、船橋、牧野氏の歌は「テレホンカード」「蛍」「すすき」に作者の心が仮託されている。生存することの不安、悲哀が漂っている。

連想を呼び寄せ思惟を促してくれる作品

たなか　みち

①飛び込みて海女の姿の消えたればしばらく息を殺しておりぬ　足立　勝歳
②校庭にささりし一本のシャベルから孤独の影がしみ出してゐる　楠　誓英
③お別れをと死者は顔を晒される恥じらうこともかなわぬままに　黒崎由起子
④雲梯を握るこぶしは震へたり真下に架空の池をひろげて　小林　幹也
⑤ガゼル逃げチーターが追う映像のいつもガゼルになっている僕　髙井　忠明
⑥「うたう」とは自白、自供の意味なりと警察界の隠語にありぬ　武富　純一
⑦横ざまに浪がかみあふ潮境あらぶる異質を瀬戸は容れざる　中川　昭
⑧咲きつくす牡丹の花の傍らをぬき足に過ぐけふのまひるま　廣庭由利子
⑨お羽黒とんぼほのかに翅に呼吸して浜木綿の葉の影を濃くする　藤井　幸子
⑩裡深く潜む暗闇ひき出して泣かせる『火垂るの墓』は嫌いだ　吉田ひさえ

①、水中の海女と陸上の作者は触れずして一体化する。束の間のタナトスとエロスの気配。②、事物の言語化を目指したポンジュを思う。根源的な孤独の姿。③、死者と作者の美意識がリンクする。死者の無念を感受する匂いやかな母性。④体内深くに秘めた怖れが「池」となり脚下に広がる。幻想が追い込む現実の私。⑤、草食性の華奢な疾走にいつも動悸する僕。弱肉強食の餌食の側の悲愴。⑥、無罪放免を得られぬまま、作者の「うたう」も又、更に続く。⑦、日常のあらゆるせめぎ合いの中で拒絶される「異質」。連想を呼び寄せる卓抜な描写の力。⑧、「ぬき足」の身体感覚が、滅びへの危うさを濃密な艶で包み込む。⑨、繊細でアンニュイな時間。細部を見逃がさない観察眼と練達の表現力。⑩、反戦の意志が中心にある。「嫌いだ」と言い切ったが、メッセージは単純ではない。

私の選んだ十首

牧野　秀子選

自然

昨夜の雪草の雫となりて落つひと粒ひと粒日に照りながら　阿部　綾子
花光る梅の枝春陽にかすみをり無人の家の塀をこえつつ　喜多　旦江
秋の蝶命ひきずり舞ひをりぬその薄き影枯れ芝にひきて　久米川孝子
子燕を空へ空へと誘いつつひらりと風に乗ってみせおり　小林　まや
太陽に響きあひつつ向日葵が花托に黒き種をささぐる　下村　千里
白鷺のいずこに通う伊勢湾の夜明けのしじま低く飛びゆく　新谷　英子
大木の棟の花は咲き盛り黄砂の中にうす煙のごと　田結荘とき子
塊返し終りて黒き土の香が春風にのりふわつと動く　西川　洋子
とうとうと大河の流るる音聞こゆぶなの大樹の一本ずつに　細目　早苗
あからひく夕映えのそら鳴き出でてまたなきいづる法師の蟬は　宮道　博

動物・植物

天道虫背の星わりて飛び立ちぬ孤独はつねに群集のなか　石橋　妙子
ラムサール響きやさしき条約に水鳥護る湖のしづもり　落合　民子
まなうらに羽ばたく影あり　小禽を愛せし亡兄の弟なれば　楠　誓英
午後、蜘蛛の糸にうつすら日は射して青空覗く慰霊碑の上　小林　幹也

春には春のわがさびしさよ雪柳白き涙をはらはらこぼす　田岡　弘子
わたなかに打ちあひ重なりあふ浪のうねりつつ巻く渦の花びら　中川　昭
急かせ呉るる者なくなれる独つ身に厠のごきぶり打たず対峙す　野瀬　昭二
お羽黒とんぼほのかに翅に呼吸して浜木綿の葉の影を濃くする　藤井　幸子
検査済みシールもう無い林檎たち、みちのくの香をしづかに放つ　藤岡　成子
その小きなづきにいかなる地図のある蝶ひらひらと舞ふ昼下り　益永　典子

生・老・病・死　前田　昭子選

遥かなる歳と思ひし米寿まで生きて心身一如を悟る　石田　昭政
有終の美とは何かを教えらるオルフェーヴルの水に濡れる目　上根美也子
取るものか重ねるものか言ひ迷ふ齢を今年も一つ加へて　田岡　弘子
認知症なりたくなくてメモを取るそのメモ探すに又一苦労　谷畑　恵山
英知とは如何なる知恵か年令古りてなほ人間に蹉く悲し　松田　和薫
残り世は老いと言う文字ロックして素敵な傘寿をかざし超えたし　松田　貞枝
わたくしの忘却曲線険しくて昔のことなど掘り返すまじ　三木とし子
わすれぬし人の名前がふいに出てそれより記憶の湖は騒立つ　矢内　温代
また一輪訣れの花を捧げられ埋もれてしまった人間ひとり　黒崎由起子
花待たず逝きたる君よ花は空へ空のあなたへラブコールの旅　三津野幸代

仕事　中島眞喜子選

銀色のパイプの足場組みゆける男貌より夕日に溶くる　阿部　綾子
一日を働き通して漸くに智秋と言う名の自分に戻る　石原　智秋
閉まりゐる扉の数だけある闇がわづかにきしむ職員ロッカー　楠　誓英
豌豆の支柱立ち上ぐありし日の夫に習ひし男結びに　上月しげ子
ケージにて餌をついばむ鶏のごと立ち食いそばを食う戦士たち　髙井　忠明
手作りの草履漬物並ばせて輪島朝市老婆等呼び込む　倉橋　愛子
体重が二キロ落ちたと嘆きつつ夫は猪番火を焚きにゆく　田渕　和子
あす知れぬ農思ひつつ春の泥映す緑を畦に塗りこむ　寺尾　榮禮
風を踏み光を叩き鎚を振るきみは雪国の大工の棟梁　藤本　則子
勝ち取りし電車の席に人々は首垂れて寝る同じ姿勢に　永山　洋子

生活　保田　ひで選

見るたびに取ろうと思い二十年、天井にある錆びた押しピン　飯田　進
酷暑の秋やうやく終り爪先の冷えに耐へつつ睡へと落つる　小畑　庸子
床下に蛙のすめばこれからは独居世帯とおぼし召さるな　片山　洋子

夢希望なきとぞかこつ老いし友種まく畑があるではないか　岸本しげ子
いよよ華やぐいのちなりとはいいかねる老いの日なれど陽はさしており　楠田智佐美
はたらかず書かずしやべらずつるばみの雨のひと日のくれにつるかな　上月しげ子
ひと匙の蜂蜜ほどのやすらぎの入り日に打たれじつとしてゐる　廣庭由利子
Bの鉛筆、○・五ミリのボールペン伴侶のやうに右手に馴染む　藤岡　成子
ひとり食む季節外れのふじりんご硬き果肉に泣けてくるなり　山中　洋子
イチョウの葉一枚我と入りゆく定員二名の回転ドアに　吉永　明代

旅・世態　吉野　節子選

青嵐に囃され乗りたるリフトなり背筋を立てて梅丈岳ゆく　落合　民子
自転車に空缶山積みにせし媼追い風にのり軽がるとゆく　小野山富美子
JR新宿駅の東口出たら辺境人のかなしみ　木野誠太郎
太陽光パネル等しく傾斜して休み田は今ひかりのすみか　菅原　艶子
隣り家の老人逝きて解体の大屋根落つるか地にひびきくる　中道キミ子
地の涯の春の浜に出て貝ひろひ貝の穴より見ゆる国後島　西五辻芳子
「断捨離」にそそのかされて捨てしことといまにして悔ゆ服の幾枚　浜崎　泰子
テロ惨禍報ずる画面眼の隅に二合ばかりの米研ぎはじむ　丸山　浩子
百歳まで生きたらどうしやう大丈夫励ましくるる浪人の孫　前田　安子
宮殿の遺跡に住みて物を売るクロアチア人の腕の太さ　森嶋　郁子

社会・政治　清水　昭男選

「集団的自衛権」とふ葛籠　負はされ開ければにゆつと戦争　荒浜　悦子
被災地の気仙沼駅前案内所の貸し自転車二十台はそのままにあり　石田　勝啓
ラムサール響きやさしき条約に水鳥護る湖のしづもり　落合　民子
ダイヤルのもどる時間のもどかしいときめきの中にありし昭和の　木南　英子
東京へはばたく小鳥の切手に添ふ白兎かしこまる二円の切手　久米川孝子
高性能といえど「憲法改正」が「弁当返せ」と聞こえる補聴器　髙井　忠明
わたしにも勝負下着といふありて検診の日のオーガニックコットン　たなかみち
高齢化の家庭事情も書き添へて同窓会の断りを出す　藤井　貞子
噛みそうな人の名前を五歳児はなんなくこなすきゃりーぱみゅぱみゅ　山本　久子
「特定秘密保護法案」可決されいつか来た道歩まされんや　吉田ひさえ

愛・恋

三津野幸代選

遠しとも近きとも思う君ありてその折折の言葉に揺れる　阿久根シヅ子
モーニング・コーヒー少し苦くってあなたを思う　怒っているの　岩田美代子
胡蝶蘭を食むことの意味が少しでもいいから君に伝わればいい　上條　翔太
細胞のひとつひとつが貴方を想っているので僕は平気です　木野誠太郎
携帯のメールに君は帰りゆく言葉はいらぬ蹴りたい背なか　田口　幸子
老いらくの恋のほめきは散りそめの桜の花のうすずみの色　中川　昭
二人来て海上花火大会のきれいな闇に手をつないでる　西塚　洋子
甘きこと憂きことすべて夢の中妻と傘寿の日々を楽しむ　松田　和薫
白南風に柳ゆるがす湯の町を二人の下駄の奏でるハーモニー　安田　重子
球状の美男葛の朱の実を耳に揺らせて会いたき人あり　吉永　明代

言葉を磨きたい

浮田　伸子

兵庫の歌人の層の厚さがここに結集した。昨年の秀歌抄に揚げられている人のうち二十名ほど歌がみられない。高齢化のせいばかりとも言えまい。年齢にかかわりなく、瑞々しい感性を発揮する人、ゆく時を惜しむ人、独自の発見を詠む人、抑えて嘆く人、多士済済である。

わたしには関西弁で話しくる桃の花咲きもうすぐ四つ　秋本　多恵
この電球の消え方のよしぐづぐづと弱まりてゆきパッと消えたり　足立　晶子
小さき黄の花より実へと日々育つ夏の胡瓜のひたすらに触る　伊藤佐重子
長くながく送電線の垂れてゐて「あなたのすべて重い」と言はれき　楠　誓英
掌を組みて仰向けに髪を洗はれつつエンバーミングといふを思へり　藤井　幸子
人知れず聖アントニア様と唱へつつ今日また通帳探す一日　増井　定子
蟷螂の小さきがシャツについて来た　さよならしよう草の所へ　丸岡　哲朗
ひとり食む季節外れのふじりんご硬き果肉に泣けてくるなり　山中　洋子

数を惜しんで前年以外の歌人を引いた。

感動を表現する詩も短歌も、ものをみる眼の確かさや深さが求められる。豊かな風土から生まれる感動を磨きぬいた言葉で表現したいものである。

平成27年度ふれあいの祭典
兵庫短歌祭

主　催　兵庫短歌祭姫路市実行委員会・兵庫県・姫路市・（公財）兵庫県芸術文化協会・兵庫県歌人クラブ
後　援　兵庫県教育委員会・姫路市教育委員会・神戸新聞社

応募要項

作　品　未発表作品1人1首
締　切　2015年8月20日（木）当日消印有効
送り先　〒675-1113　加古郡稲美町岡1630　前田昭子方　ふれあいの祭典兵庫短歌祭事務局宛
応募料　1,000円（切手不可）※応募者に作品集無料送付
応募方法　応募用紙またはA4の原稿用紙に郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、電話番号、作品1首を明記し、応募料を添えて郵送してください。
選　者　兵庫県芸術文化協会、姫路市、兵庫県歌人クラブ顧問・幹事
賞　文部科学大臣賞、兵庫県知事賞、兵庫県議会議長賞、兵庫県教育委員会賞、姫路市長賞、姫路市議会議長賞、姫路市教育委員会賞、ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会賞、神戸新聞社賞、兵庫県歌人クラブ賞ほか。

短歌祭のご案内

〈入場無料〉

日　時　2015年11月14日（土）　午後1時～午後4時
会　場　姫路キャスパーホール（山陽百貨店7階―姫路駅すぐ）
内　容　入賞作品表彰と講評
催し　「結社対抗歌合せ」　判者　島田幸典　歌人等未定

受贈歌集・歌書

☆『年刊歌集』第60集　26年10月1日　京都歌人協会委員会
☆『年刊歌集』第37集　26年10月10日　西宮歌人協会
☆『澪つくしⅢ』　2014年　大阪歌人クラブ40周年記念合同歌集　楠田立身
☆『白雁』　26年11月7日　ながらみ書房
われのため祈りし君がひたすらの護符持ちて元朝の光を歩む
☆『花と幽玄の覚書』　石橋妙子　11月10日本阿弥書店世阿弥の芸術論
☆年刊歌集『きのくに』49集　26年11月20日　和歌山県歌人クラブ
☆年刊歌集『童嶺』第55号　27年1月1日　西脇短歌会
☆『合同歌集　第15集』　27年1月30日　加西短歌の会
☆『座標』　藤本朋世　27年3月3日　砂金短歌会叢書135篇
昨夜たしか枕辺すぎし風あらむ道ばたに朱にはなびら散れり
☆『からすうりの花』　吉田佳菜　27年4月16日　株式会社国際メディア
誰が編みてほどきし糸か白白とからすうりの花夕べの垣に
☆合同歌集『猪名川』15号　27年3月　足立晶子短歌教室
動き出すにがつのにわは楽しかり思わぬ所に思わぬ芽ばえ　斎藤紀久美
☆『年刊歌集』第2集　27年3月20日　淡路歌人クラブ
☆歌書『短歌つれづれホームページ』　小谷博泰　27年4月25日　和泉書院　評論とエッセイ集

「第4回歌集批評会」記

矢内　温代

平成27年2月21日兵庫勤労市民センターにて批評会が行われ、会場は満席となった。

今回は久米川孝子歌集『ことばの銀河』と武富純一歌集『鯨の祖先』が取り上げられた。レポーターは落合けい子氏と小谷博泰氏。司会は小林幹也氏が担当した。

久米川歌集は、①ことば②ヘルパーとの対話③歌と自己との関連性の三本の柱から成っているとレポーターの落合氏が評され、老いを感じさせない精神の健やかさが強い作者の姿が浮かび上がる次のような歌が取り上げられた。

・さくらさくら繰り返し言ふそれだけでほのと明るむ心なりけり

・生活援助のヘルパーきたり一人居(ひとりゐ)の自由が少し束縛さるる

一方、武富歌集はユーモアたっぷりで明るい歌集の中から関西弁が聞こえて来そう。口語と文語の併用で自分の感性を表しているとして小谷氏から次の歌が取り上げられた。

・月曜には逃がした魚も倍ほどに育ち社長の耳に入りぬ

・楽しみに取っておきたる草むしり妻が勝手にやってしまえり

また最後に、久米川氏より今後も心を自由に遊ばせて詠みたい。武富氏より次にはもっと高みを目指すとの力強い言葉が出た。両歌集に会場からも多くの意見が出され、良い批評会であった。

前列左から２人目武富氏、３人目久米川氏

リニューアルオープン ホームページ

このほど、ホームページのデザイン、内容等をリニューアルしました。ヤフー、グーグル等で「兵庫県歌人クラブ」と検索すると出てきます。短歌大会、歌集批評会、各種イベントの日時、場所、内容等のお知らせに加え、その終了後は、簡潔な記事や写真等、会報を補足するような情報を迅速に掲載していく予定です。又、「お問合せ」欄よりメールアドレス等の連絡先を添えていただければ、メールでのやりとりも可能です。パソコンの「お気に入り」に入れてイベント情報の確認などに活用してください。併せてサイト運営へのご要望やご意見などもお知らせください。

担当　武富　純一

地区通信

【阪神】 2月1日、園田学園女子大学にて第12回契沖顕彰短歌大会開催。選歌と歌評は安藤直彦、田岡弘子、たなかみち、中野昭子の各氏他4氏が担当。契沖大賞は松村和子氏。受賞作品の総評は一般の部を安田純生氏が、学生の部を吉原栄徳氏(契沖研究会会長)が担当。(たなかみち)

【神戸】 11月27～28日、ポートピアホテルにて花鏡創刊30周年記念祝賀会、式典、記念講演、歌会開催、50名出席。▼12月1日、神戸芸術文化会議より『2013こうべ芸文アンソロジー』刊行、尾崎まゆみ、中川昭、増井定子各氏ら6名が参加。▼1月8日、文学圏新年歌会開催、21名参加。▼23日、尼崎ポップインホテルにて関西潮音新年歌会開催、40名参加。▼26日、ホテルホップインにて花鏡新年歌会開催、30名参加。▼28日、ホテルオークラ神戸にて神戸芸術文化会議学術セミナー・新年のつどい開催、浮田伸子、尾崎まゆみ、黒崎由起子、小谷博泰、中川昭各氏が参加。▼2月2日、東京文京区ふれあい会館にて日本短歌誌連盟理事会開催、三津野幸代氏出席。▼12日、文学圏運営委員会開催、代表下村千里、発行人浮田伸子、編集人青田綾子各氏が再任。▼4月3日、徳島宅宮神社にて花鏡さくら吟行会開催、25名参加。▼4月6日、生田神社にて曲水の宴が開催され、井戸敏三県知事、安藤直彦、中川昭、小林幹也、尾崎まゆみ、西橋美保、廣庭由利子各氏が参宴、披講近衛忠大氏。▼7日、大山寺別院歓喜院にて薫風大山寺歌碑前歌会を開催。▼4月9～14日、さんちかホールにて「神戸の百人色紙展」が開催され、尾崎まゆみ、中川昭、黒崎由起子各氏が出品。(黒崎由起子)

【明石】 11月23日、明石市生涯学習センターにて第41回明石市文芸祭表彰式を開催。短歌一般部門の応募総数339首。選者楠田立身氏。市長賞土屋利之氏。ジュニア部門の応募総数1789首。選者田岡弘子氏。市長賞米田碧さん。式後、選者の講評。▼12月4日、明石市柿本神社にて第153回柿本神社秋季献詠祭を開催。選者楠田立身氏。兼題「実」競点題「鳥」。▼1月1日、明石ペンクラブ(代表野瀬昭二氏)会報134号発行。(伊藤敦子)

【姫路】 3月10日、ゑちうどの会は創刊20周年記念『ゑちうど』第20号を発行。▼3月15日、姫路市民会館にて小島ゆかり

氏を迎えコスモス姫路支部歌会開催。飯田進、水野美子、春藤和子、小坂喜久代、藤岡成子各氏他50名出席。▼3月20日、姫路キャッスルホテルにて文化交流フェスティバル開催。尾上田鶴子氏は短歌の部で第37回姫路市芸術文化賞を受賞。水野美子、小畑庸子、生田よしえ、浮田伸子、飯田進、浜崎泰子、三宅幸子各氏他コスモスから多数出席。　(山田　文)

【東播】 1月11日、稲美町小、中学生の「新春かるた大会」を稲美町文化連盟主催で開催。朗読前田昭子氏他▼3月15日、茅花短歌会は、恒例の第38回菅原道真公奉賛献詠祭を天満神社で開催。一般の部出詠153首、出席者48名。小学生の部出詠346首。出席者55名。選者小畑庸子、松田和薫、前田昭子各氏。特選兵庫県知事賞鈴木裕子氏他7名。優秀8名。学生の部特選7名、優秀6名受賞。　(前田昭子)

【中播】 11月7～9日、香寺・恒屋川短歌会は姫路市公民館祭りに協賛して短冊出展。▼12月10日、香寺短歌会は助六にて創立五十五周年を祝う会を開催し、五十年在籍者に記念品を贈呈。出席者13名。▼1月22日、市川文化協会は新春短歌会開催。青田綾子氏他4名入選。選歌と選評は小畑庸子氏。▼1月24日、NHK全国短歌大会にて吉永明代・石口さよ子(両氏とも水甕)入選。▼1月31日「角川全国短歌大賞」にて真砂晃美氏(水甕)は永田和宏氏秀逸。大井杏子氏(水甕)は題詠部門小畑庸子氏選者賞。▼2月8日、第9回神崎町文芸祭開催。選歌と講評は小畑庸子氏。▼3月1日、ポトナム姫路支社は年刊歌集『ポトナム姫路』第十四号刊行。編集発行ポトナム姫路刊行委員。　(生田よしえ)

【北播】 11月8日、滝野文化会館にて文化連盟祭第9回加東市短歌大会開催。応募数一般の部92首、ジュニアの部149首。一般の部市長賞藤木千恵子氏(小野市)ジュニアの部入選大橋武尊さん(社小6年)他14名。出席者加東市長安田正義氏他55名。▼9日、アスティアかさいにて第48回加西市文化祭文芸祭開催。短歌応募数一般の部192首、ジュニアの部243首。選者一般の部尾崎まゆみ氏、ジュニアの部加西短歌の会役員。一般の部市長賞大谷明美氏(坂元町)ジュニアの部埴岡みつきさん(賀茂小3年)。出席者加西市長西村和平氏他40名。▼1月1日、西脇短歌会は『童嶺』55号発行。出詠者37名。▼1月30日、加西短歌の会は『合同歌集』15集発行。出詠者62名。▼4月29日、西脇市高松町宝光院にて第36回源三位頼政公奉賛献詠短歌大会開催。応募数86首。選考は北播各地区幹事15名。講師三村時枝氏。特選第一席伊藤たま子氏(西脇市)。出席者藤原孝雄氏他20数名。　(松尾鹿次)

【西播】 2月19日、新宮公民館にて、たつの市新宮文化協会主催、第三十六回「たつの市新宮短歌俳句大会」開催。選者、安藤直彦氏。一般の部黒田富江、木南圭子各氏ら37名参加。特選塚本誠子氏。ジュニアの部、280首。特選谷口小桃さん(新宮小)。▼3月22日、南光文化センターにて、佐用短歌連盟主催、春季短歌大会開催。安藤直彦、菅原艶子、新家イサ子、船引貴明各氏ら31名参加。春季大会賞新家イサ子氏。　(安藤直彦)

【但馬】 2月25日、谷藤眞佐惠氏、歌集『さわてらし』刊行。▼3月1日、「第一回朝来市文学のつどい」作品集発行。応募、一般の部99首。選者、安藤直彦氏。▼3月3日、新温泉町「前田純孝賞」発表。応募5143首。選者佐佐木幸綱氏。▼3月10日、「たじま作品集第39集」発行。▼3月14～4月13日新温泉町以命亭にて「前田純孝賞入賞作品展」。▼4月26日、豊岡市民会館にて但丹歌人会「春の大会」開催。▼4月26日、朝来市大蔵市民会館にて「じろはったんの里」歌会開催。　(足立勝歳)

【淡路】 12月、千鳥短歌会『年刊歌集ちどり第19号』刊行。▼3月24日、淡路歌人クラブは『年刊歌集第2集』刊行。68人の680首。各地域クラブ、結社、支部活動近況、第33回全淡短歌祭入賞作品掲載。　(来田　務)

恒屋川短歌会

東　陽子　生田みのり
大塚　好子　大西　豊子
清瀬　輝代　竹川たづる
出来佐恵子　永瀬たつ子
羽岡きよ子

代表　竹川たづる
会計　生田みのり

連絡先
〒679－2121　姫路市豊富町神谷一〇二一
☎(〇七九)二二六四－三一一一二

津布良（つぶら）

代表　兎田　孝子
編集員　逵　洋子
阿部ツヤ子

発行所
〒661－0046　尼崎市常松一－一九－二九
松村　和子
TEL FAX (〇六)六四三三－五五三七

潮音
大正4年創刊

編集・発行　木村　雅子
〒248-0011　鎌倉市扇谷3-11-4

神戸歌会　石橋　妙子
〒658-0072　神戸市東灘区岡本2-10-3
☎(078)441-3740

幹事　増井　定子　三津野幸代
安田千富美
会計　福山　裕恵
監査　三木　雅子

茅花短歌会

短歌文学の鑑賞と作歌についての研修を行い、清新自由で個性に応じた作歌を目指します

毎月第二水曜日九時よりふれあい交流館で勉強会
隔月に茅花誌を発刊

講師　松田　和薫
代表　前田　昭子

〒675－1113　加古郡稲美町岡一六三〇
TEL FAX (〇七九)四九二－一七六六

とべら
(月刊)

代表者　木山　正規
編集・発行者　尼子　勝義
発行所　とべら発行所

〒678-0163　赤穂市高雄1876-1
尼子方
☎(0791)48-0137

西宮歌人協会

会　長　井上　美地　☎(0798)72-0214
委　員　土本　綾子　益永　典子　芝淵田鶴子
高橋　武雄　河村　公美　伊藤千寿子
黒坂　孟弘　桂　功三　西海　隆子
小林　幹也　渋谷　恭子

歌　会　毎月第3水曜　13時より中央公民館
連絡先　伊藤千寿子　☎(0798)64-1301
歌　会　毎月第2月曜　13時より夙川公民館
連絡先　上松　菊子　☎(0798)71-7337
歌　会　毎月第4木曜　13時30分より越木岩公民館
連絡先　高橋　武雄　☎(0798)74-5851

姫路歌人クラブ

顧　問　安井　一美　水野　美子
代　表　楠田　立身
副代表　神保原広己
会　計　内海　永子　小松カヅ子
会計監査　青田　綾子
首藤　幸子　三宅　幸子
事務局
〒671－2224　姫路市青山西四丁目五－六
西村　久代方
☎(〇七九)二六七－二七六七

水甕明石支社

左記で、毎月歌会を開いています
お気軽にご参加下さいませ
◇第一土曜日　午後一時より
◇場　所　人丸堂三階
◇連絡先　向山　明子
〒673－0870　明石市朝霧南町三丁目十一－九－三一四
☎(〇七八)九一四－〇〇七八

西脇短歌会

会　長　藤原　孝雄
副会長　藤中　光代
〃　藤本　勝子(事務局)
会　計　杉岡　静依

事務局
〒677-0043　西脇市下戸田578
藤本　勝子
☎(0795)23-2377

文学圏

郷土に生まれ、郷土が育てた短歌誌
創刊昭和21年

代　表　下村　千里
編集人　青田　綾子
発行人　浮田　伸子
発行所　〒651－2276
神戸市西区春日台1-8-1　浮田方
☎(078)961-5676
編集委員　内山　嗣隆・岸本　寿代
宮脇　経子・山本　圭子
山本　君子・吉田千代美
会　計　吉永久美子

林間阪神支社

伊藤佐重子・池田　好子
石黒　陽子・内井　幸子
倉橋　愛子・芝淵田鶴子
野田　富子・南　操子
吉村すゑ子
〒662－0944　西宮市川添町一－一四
芝淵田鶴子方
☎(〇七九八)三六－一九〇七

波濤神戸

発行人　保田ひで
発行所　波濤神戸支部
連絡先　〒653-0852
神戸市長田区山下町1－5－15
保田　方
☎(078)612－9294

尾末　立花　富岡　田渕　三好弥　保田
幸子　道子　経子　知子　寿子　ひで

白圭

編集委員
内海　永子
鎌谷　克子
川上千鶴子
塩澤　文子
首藤　幸子

発行所
〒679-4003　たつの市揖西町小神297-1
内海永子方
白圭社
☎(0791)63-4734

旅笛

歌は人生の旅路に携える一管の笛

編集　角倉　羊子
黒崎由起子
小笠原明子

旅笛の会
〒178-0064　東京都練馬区南大泉2-23-8　梅村方
角倉　羊子
〒651-0052　神戸市中央区中島通1-1-25-102
黒崎由起子

東浦短歌会

代表　片山田佳子
毎月　第2木曜日　13時30分～
歌会
東浦老人福祉センターにて
会費　月　千　円

連絡先
〒656-2311　淡路市久留麻2346-6
片山田佳子
☎(0799)74-2141

ポトナム姫路支部

＝地区代表＝

(姫路)　(佐用)
西門和子　新家イサ子
羅川範子　吉田照子

連絡先
〒671-2247　姫路市緑台1-7-1
羅川　範子

玲瓏

[玲瓏の會]

塚本邦雄詩歌アカデミア迫真的想像力の
飛翔を期するサンボリスムの殿堂

呈送稿要領見本誌
御希望の方は
〒262-0026　千葉市花見川区瑞穂2丁目1－1
ガーデンプラザ新検見川2－906
塚本青史方
Tel/Fax 043-211-6704
http://reir.blue.coocan.jp

東加古川短歌会

水野　美子

郡　英子　小西　春見　佐藤　咲子
須鎗みち子　谷村　孝子　福山　祥子
水野　美子　村田　弘子　矢内　温代

美加志保短歌会

創刊　昭和二十一年十一月

委員　藤木千恵子
松尾　鹿次

〒675－1371　小野市黒川町五七三
編集兼発行人　松尾　鹿次
☎(〇七九四)六二－二八四六

六甲

昭和八年創刊

発行所・代表　田岡　弘子
〒673－0845　明石市太寺四－一－三〇
☎(〇七八)九一二－二六七三
会計室　加西市網引町　小田弥生
運営・実務委員
竹本美屋子　志方　弘子
石原　智秋　牧野　秀子
西川　和子　青山　俊代
村瀬　美雪　黒川　明子

兵庫県歌人クラブ　年刊歌集第五十五集作品募集案内

作　品　十首（過去一年間の自作、既発表・未発表問わず）・題を付す
様　式　四百字詰め原稿用紙（A４判）二枚を用い、楷書で明記・右肩を綴じる
一行目に①題名　②氏名（題名の下に書き、**必ず「ふりがな」**を付す）
二行目はあけ、三行目から③作品十首　④二枚目末尾に所属結社または団体名・郵便番号・住所・電話番号を明記
かな遣い　新・旧いずれかに統一し、歌稿右肩欄外に**新・旧**の別を明記
参加料　三千円（歌稿に同封して送金―切手代用不可）
資　格　問わない（会員・非会員の別なく誰でも参加できる）
締　切　二〇一五年八月二〇日（当日消印有効）
送付先　〒六五八―〇〇二七　神戸市東灘区青木二―二―一―六一七
三津野幸代方　兵庫県歌人クラブ年刊歌集刊行委員会あて
電話〇七八―四三一―八六六五

伝統文化体験フェスティバル

兵庫県公館
２０１５年３月７・８日

短歌はむつかしくない！

桂　保子

三月七日、あいにく小雨の降る肌寒さで参加者数が心配されたが、親子一組と高校生のグループを含めて十七人の参加者。短歌は万葉集から始まる伝統詩であることをまず伝え、次に現代短歌を相聞歌、挽歌、ウイットに富むものなどジャンル別にして秀歌紹介。さらに、果実を素材にした歌を穴空き問題にして短歌脳トレをしてもらった。その果実名を発言してもらう中で笑い声も上がり和やかムードに。そして私たちのＤＮＡの中に短歌遺伝子が組み込まれていることを伝え、いよいよ短歌実作！会員の手助けもあり次々に作品が仕上がってくる。それを順に板書し、添削を加えるのだが読み上げると即、共感の拍手が湧いたり、老若男女が一つになれたいい瞬間だった。

短歌創作体験中

高校生のはつらつとした言葉の斡旋に驚いたり、小三の少女の伸びやかな感性の歌にうれしくなったり、こちらが楽しませてもらった七十分だった。

これからが楽しみ

楠　誓英

三月八日（日）、一四時五〇分より、実作指導を行いました。はじめに短歌について知って頂くために、『万葉集』から現代短歌までの恋歌一三首について解説しました。参加者は、九歳の小学生から七〇歳代の男性までと幅広い年齢層でした。

恋歌は、なかなか難しいものも多く、子供には難しいかと思われましたが、皆さん熱心に耳を傾けておられました。

実作は、「恋」、「春」をテーマに詠んでもらいました。皆さん、レベルが高く、驚きました。

・恋のうたつくれといわれうつむくに妻と娘の顔しかなしか
・サバンナのみどりけちらすインパラよ踊れ歌へよつかのまのいのち
・はるがきたぐんぐんのびるつくしみてわたしのせたけもぐんぐんのびる
・ホトケノザ道をふちどり春風がこわれたドアをどんどんたたく

三首目は、九歳の少女。四首目は、十代と思われる少女。これからが楽しみです。

◇余滴◇

多くの方々のお力を得て発行することができました。ご協力感謝しています。この会報が会員相互のつながりに役立ちますように。

（森嶋郁子）

平成26年度収支決算報告書

自　平成26年4月1日～至　平成27年3月31日

収入の部　（単位　円）

費　目	摘　要	金　額
前年度繰越金		2,166,859
会　費	578名	674,500
結社広告費	3000x46口	138,000
歌会広告費	1000x46口	46,000
年刊歌集余剰金		33,188
ふれあい短歌祭余剰金		132,153
新年会余剰金		3,160
預金利息		129
寄　附	土居　正　氏	10,500
寄　附	三津野幸代氏	10,000
寄　附	久米川孝子氏	10,000
批評会余剰金		22,150
合　　計		3,246,639

支出の部

費　目	摘　要	金　額
会報費	No. 191　192	616,106
通信費	事務連絡	42,902
交際費	協賛金・弔慰金	64,255
幹事会費	会議費	16,136
事務局費	渉外・会場費・交通費	158,793
消耗品費	コピー・宛名シール他	25,992
シンポジューム・総会	補填	321,969
伝統文化体験フェスティバル	補填	9,000
新人賞	平成25年度後期補填	129,210
新人賞	平成26年度前期補填	12,926
次期繰越金		1,849,350
合　計		3,246,639

会計　池本登代子　楽
平成27年3月31日

上記の通り相違ありません

監査　小畑　庸子　畑